

麻酔博物館 館長 挨拶



手術を受けるときには、麻酔は必須の要件です。しかし、麻酔がなかった時代があるのです。また、現在行われている脳や心臓、肺の手術ができるようになったのは、全身麻酔の進歩があったからです。麻酔の進歩なしには、手術の発展はなかったと言えます。

日本麻酔科学会は1954年に設立されました。モートンがエーテル麻酔の公開実験を行ったのは1846年で、日本ではそれよりも40年程早い1804年に華岡青洲による全身麻酔が行われましたが、明治以降の日本の医学界において麻酔はほとんど顧みられてきませんでした。このような状況を打破したのは、第二次世界大戦後の1950年に行われた日米連合医学教育者協議会でのDr. M. Sakladの講演でした。その後、吸入麻酔薬や静脈麻酔薬などの麻酔薬、麻酔器や人工呼吸器などの機器、心電図やパルスオキシメータなどのモニターの進歩に支えられて、麻酔科学は発展してきました。また、他学会に先駆けて本邦初の専門医制度を作り上げてきました。

麻酔科医の仕事は、手術中痛みを感じさせないだけでなく、意識のない術中の患者さんに変わって、患者さんの命を守ることです。また、麻酔科の守備範囲も集中治療・救急領域、ペインクリニック/緩和領域に、専門領域としての小児麻酔や心臓血管麻酔、産科麻酔へと広がってきました。近年麻酔科医の医療安全に果たす役割の重要性が認識されるにつれて、社会から一層の活躍が求められてきています。

日本麻酔科学会では、これら日本近代麻酔史に係る貴重な資料・資料の収集、展示を目的として、2009年8月に日本医学会の中で初めての「麻酔資料館」を開設しました。さらに2011年5月には「麻酔博物館」として、内容を充実・拡大いたしました。麻酔博物館の開設は広告塔的存在となったこと、麻酔の歴史を目で見ることが出来るようになったことで、全ての会員に麻酔の歴史に対する認識が培われたように思います。また、公益社団法人として一般市民にも公開をしており、国民への麻酔科学の啓発に寄与しております。

この度、2021年に第10回国際麻酔学史シンポジウム(ISHA)が、神戸で行われる第67回日本麻酔科学会学術集会と同時開催されることが決まりました。博物館の存在は、国際麻酔学史シンポジウムの誘致には必須であったと思いますし、2021年は麻酔博物館が2011年に開館して以来10年目を迎える記念すべき年でもあります。また、国外の医師にも、日本の麻酔史を知ってもらう良いチャンスを得ることになりました。世界の麻酔史研究の推進に一役を担うことが出来ることを期待すると同時に、日本の国民の皆さんや多くの麻酔科医に麻酔史の意義を理解してもらい、興味を持ってもらうチャンスにしたいと考えております。

日本の麻酔の歴史を後世に伝え、国民の皆さんが麻酔に対する理解を深めるために、常に進化を続ける博物館作りに努めたいと思います。

館長 武田純三